

「生活で活用できる力」の育成を目指して

～「つながり」を生かす指導の工夫～

宮城県技術・家庭科研究会

石巻市立渡波中学校 教諭 佐々木 昭夫
度は「つながり」を深める指導について研究した。今年度はつながりを生かす指導の工夫について研究を深め、まとめを行っていきたいと考えている。この研究を通して、生徒に授業で学んだことを生活で活用できる力を身に付けさせていきたい。

1 はじめに

現在、日本は少子化、情報化、国際化等の様々な問題を抱えている。その中で生徒が時代の変化をしっかりと受け止め、新たな価値を自ら創造し、生活をより良いものにしていく力の育成が望まれている。そのためには、私たち教員が生徒に学校で学んだことを深く考えさせながら実生活で活用できる力を育てる必要があるだろう。

宮城県では「志教育」という教育の指針を設定し学校と家庭・地域との強い絆を、仙台市では同様に「杜の都の学校教育」を指導の重点において学校と家庭・地域と連携した教育をそれぞれ推進しており、学校と家庭・地域とのつながりや実体験を通じた教育が重視されている。

私たち、宮城県技術・家庭科研究会では、平成12年度より生活に関わる内容を中心にテーマを設定しながら研究を進めてきた。基礎的な学習内容をしっかりと定着させると共に学んだことを単に学習として終わらせるのではなく、いかに実生活で活用し生活を工夫していくのかという視点を大切に実践している。そこで、授業において学習内容と生活との関連を明確にし、生活とのつながりを想定した学習を「つながり学習」とし、指導の工夫について提案したい。

東日本大震災から約6年が過ぎた。宮城県も甚大な損害を被り通常の学校教育を再開することすら困難な時期があった。しかし、この経験から当たり前にある物（衣食住）に対する感謝の気持ちや、家庭・地域でのつながりが人々を勇気づける大切な役割を果たすことを学んできた。実生活と関連の深い技術・家庭科という教科の特性を生かし、「つながり」をキーワードに研究を進めてきた。

本研究は3年計画の3年目にあたる。昨年

2 研究のねらい

宮城県では、授業において学校と家庭、学校と地域、家庭と地域、学校間のつながりを明確にし、それぞれのつながりを深める手立てを講じていくことにより、生徒に学習内容を生活に活用できる力を身に付けさせられると考えた。

「生活で活用できる力」とは、生活（学校生活・家庭生活・社会生活）する上で直面する様々な問題の解決にあたり、今までに学んだ知識及び技術を応用し解決方法を探求し組み合わせ、より良い方法を創造する態度・能力とする。

「つながり」とは、学習内容と生活との結びつき、かかわりといえる。また「つながりを深める」とは基礎的・基本的学習内容と生活とのつながりを生徒に提示し、授業等を通して考え、学び深めることとする。

以上のことから、本県では具体的な手立てを講じ、授業検討会を含めた実践授業とアンケートを通して生徒の変容を確かめながら研究を進めていきたい。

3 研究内容

21世紀を生きる生徒の育成のために、時代の変化を受け止め、未来を切り開こうとする生徒の育成が急務といえる。そのためには学習内容を実際に生活で活用し、様々な問題を主体的にとらえ、工夫・創造し解決できる生徒を育てなければならない。そこで研究の具

体的な方法として、「気付く段階」「考え、学ぶ段階」「生かす段階」の三つの段階の学習（つながり学習）を指導の工夫とし研究を進めたい。

(図1 研究構想図)



図1 研究構想図

また三つの段階の前段階として、技術・家庭科の授業において基礎的な学習内容をしっかりと生徒に身に付けさせる必要がある。この学習内容の定着後「つながり学習」を進めたい。

(図2 つながり学習)

(1) 気付く段階

気付く段階では、小学校家庭科と中学校家庭分野との内容の系統性や連続性、技術分野における小学校の理科のエネルギーに関する学習との関連、また、小学校からの情報教育の継続

性、技術・家庭科以外の教科との関わり等を基盤とし、学習内容と生活とのつながりに気付かせる段階である。生徒自らが生活において直面する課題に、必要な情報や技術を適切に取り入れるためにも生活と学習内容のつながりについて確かな理解が重要と言える。そのためには教員自身がつながりをしっかりと捉え生徒に考えさせながら深く学ばせる必要がある。

(2) 考え、学ぶ段階

第一段階の気付きについて、実際に活用する生活の場面を授業内で設定することや、家庭や地域、あるいは他校種（小学校、高等学校、大学等）と生徒が交流すること等を通して、気付きをより深く考え、学ぶ段階といえる。この「考え、学ぶ段階」では大きく三つの取り組みを行いたい。

一つめは適切な題材の活用である。生徒がつながりをより意識しやすい題材を十分に吟味し選定を行う。

二つめは指導の手立ての明確化である。選定した題材を用い、つながりを深める指導をするために指導過程においてどの場面で示し、考え、学ばせるのか、手立てを明確にする。

三つ目はワークシートの工夫である。

以上のことから、次に示す方法で工夫し、生徒たちが「考え、学ぶ段階」での学習での手助けとしたい。

- ・ワークシート作成の意図を明確にし、生徒の考え方（工夫、創造）を手助けする部分なのか、また知識や理解を促す部分なのかを意識してワークシート作りをする。

(図3 ポイント1)

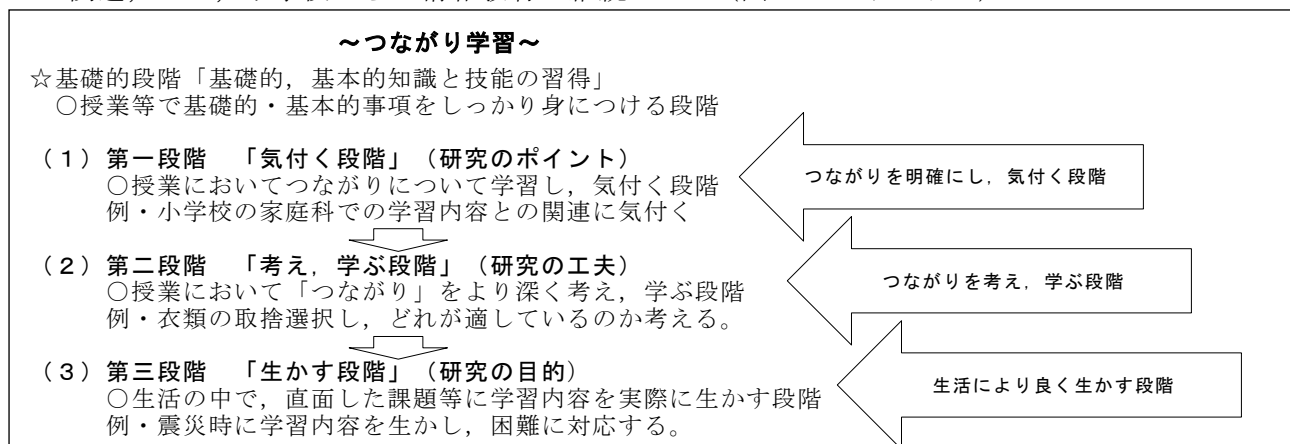


図2 つながり学習

- ・題材ごとに生徒に見通しを持たせるための題材確認表（題材ごとに授業の振り返りや学習内容を生活で活用する場面の想定を記入するもの）を作成し、感想の蓄積と自らの思考の変化をたどらせる。

（図3ポイント2）

～「考え、学ぶ段階」の取り組み～

①適切な題材活用
適切な題材の設定 題材内におけるつながりを明確にした「題材指導計画」の作成

②指導の手立ての明確化
授業における指導の手立てを明確にし、つながりと関連を指導過程上に位置づける。

③ワークシートの工夫…（図3）
ワークシートの意図の明確化、題材に関する見通しを持たせるために題材確認表を作成する。

(3) 生かす段階

「生かす段階」とは生徒が学校生活、家庭生活、社会生活において、学習した内容を工夫し生かす段階とする。例えば、震災時に学習した内容を生かし、より良い生活環境をつくること、また環境問題に関して自分が今できることを実践すること等である。言い換えれば、この「生かす段階」を生徒がしっかりと行うことができれば、本研究の主題である「生活で活用できる力」の育成につながるものと考えられる。

(4) 授業実践例等

① 気付く段階

授業において、つながりを明確に提示することにより、生徒が生活とのつながりに気付くことができたと考えられる。

- ・ 実践例1…技術分野（A内容）

「ものづくりと材料」

各授業のはじめの10分間を用いて継続的に宮城の建材の特徴や地球環境について学ぶこととした。生徒は単元を通して生活とのつながりに気付き、より深く認識できた。

② 考え、学ぶ段階

- ・ 適切な題材活用について

「題材指導計画」を全県で作成し、約60の題材につながりを位置付けることができた。この「題材指導計画」はインターネット上に

示し、いつでも活用できるものにした。また題材についてもより生活につながりのあるものを選択することができた。

～「ワークシートの工夫」～

ポイント1

★ワークシートの意図をしっかりと持つ

(1) 関心・意欲・態度をねらう
自分の意思表示や自分の気持ち、態度をはっきりさせる欄を設定する。

(2) 工夫・創造をねらう
書きながら自分の考えをまとめ、根拠を明確にする欄を設定する。→思考の流れを示すワークシート

(3) 知識・理解をねらう
書きながら知識を整理したり、理解を深めたりする欄を設定する。

ポイント2

★授業の見通しを持たせる（題材確認表）（例）

題材確認表		年 組 番 氏 名	
題材名「消費と環境」	題材の目標 自分の生活を見直す		
	主な学習内容	授業の振り返り	生活で活用するには
1	お金について考えよう	※目標に関する振り返りの記入	

図3 ワークシートの工夫

- ・ 実践例1…技術分野（内容C）

「仙台白菜を栽培しよう」

仙台白菜を販売している企業の方から仙台白菜の由来等の説明や、農家の方から栽培方法の説明等を受けた。また地域の方との交流を通して、つながりをより深く考え、学ぶことができる題材であった。



- ・ 実践例2…家庭分野（内容C）

「日常着の手入れ」

自分たちの制服を卒業式に向けて手入れをするという題材を設定した。卒業式に関連し、家庭や地域とのつながりを示しながら作業をさせることでより深く考え、学ぶことができる題材であった。

③ 生かす段階

- ・ 「生かす段階」を意識した授業づくり

生活に生かすことを意識した授業づくりを意図的に行い、既習事項を後の学習内容に結びつけること、生徒が「やってみよう」と思い、実生活で実践してみたいくなる授業を意識し、授業づくりを行った。

・ 実践例1…技術分野（D内容）

「ロボットコンテストに挑戦しよう」

プログラミング学習を行うことにより、その技術の習得だけではなく、プログラミング的思考を育てることができ、日常生活にも活用することができる題材であった。また、高校生をゲストティーチャーとして招き、将来へのつながりを意識した授業を行った。



・ 実践例2…家庭分野（B内容）

「地域の食材と食文化」

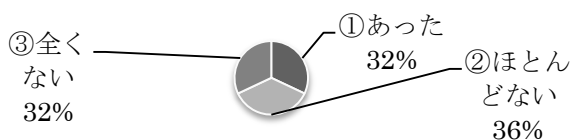
石巻焼きそばを取り上げ、既習事項である地域の食材（もの）と人（ゲストティーチャー）を関連させることで、地域の食文化を自分たちの手でも創り上げていこうとする態度を育てることができた。



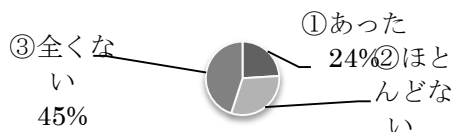
・ 「生かす段階」の見取りの工夫

実際に生徒が生活の中で生かしているか、の見取りの方法としては、レポートの提出、家族からのコメント、調査報告書の提出、実習活動での観察、まとめ発表などが考えられる。また、栗原地区の研究のように、高校に通う生徒を対象にしたアンケートを行い、経年変化を読み取るという方法も考えられる。

3-1 高校生になってから、幼児（家族・親戚以外）と接する機会がありましたか。
（中学時代、幼児交流を経験あり）



3-2 高校生になってから、幼児（家族・親戚以外）と接する機会がありましたか。
（中学時代、幼児交流経験なし）



4 研究のまとめと今後の課題

(1) 「つながり学習」の成果

平成26年度より「つながり学習」を段階的に深める指導の工夫を通して、生活で活用できる力の育成を図ってきた。我々、宮城県民にとって震災は非常に大きな出来事であり、その経験をきっかけに生活を見直し、つながりを意識する機運が高まってきた。その中で技術・家庭科という教科の果たす役割はますます大きくなってきており、この3年間の「つながり学習」を中心とした研究が技術・家庭科教育において宮城県に与えた影響は少なくはなかった。

「つながり学習」については、前段階で生徒に基礎的な内容をしっかりと学ばせることが重要であり、次の「つながり学習」に進む上でもポイントとなると考えた。しかし、今回の実践を通して、この「つながり学習」が逆に基礎的な学習内容の定着を更に促すことができたと感じた。つまり、実践的、体験的な「つながり学習」が既習の内容の確認となり、生徒の生活にとって意味のあるものとしての実感が高まったと考えられる。

(2) 課題

① 生活で活用しているかの見取りの不十分ではないか

これは評価にも関連するところではあるが、生徒が実際に学んだ学習を生活に活用しているか、ということを見取る手段が不十分であると考えられる。継続した記録の蓄積、検証が必要であると考えられる。

② 学習指導要領改定を見越した活動

実生活に生かす部分に特化してしまうと、学習指導要領との整合性が取れない部分も出てきてしまう。学習指導要領改定を見据えて、検証していく必要がある。